



巻頭言

「友達と一緒」の再考

神長美津子

幼稚園と小学校とのある合同研究会での話題ですが、小学校教師から、「幼稚園の指導計画には、『友達と一緒』という言葉がよく使われているけれど、小学校の指導計画ではほとんど使っていない。これは、小学校は友達と一緒に学習することを前提にして、授業を行っているからだろうか」と、ご自身の子どものかわりの反省の意味も込めて、疑問を投げかけられました。その話を聞き、人間関係を視点に幼小の教育を比較してみる切り口もおもしろいし、また「確かに」と思うところもありました。

友達と一緒

平成元年の幼稚園教育要領改訂で五領域の一つとして領域「人間関係」が設置されて以来、幼児教育では、子どもの視点から集団生活のルールや仲間関係が語られることが



多くなり、人間関係の育ちをきめ細かにとらえるようになってきたと思います。

いろいろな園の指導計画を見ていると、子どもの中に育ちつつあるものをとらえて、ねらいや内容を設定していることに気づきます。たとえば、ある園では、入園したばかりの三歳児の場合は、まだ子ども同士のかかわりが少ないので、「友達」ではなく、「他の幼児」と表現した方がよいのではないかと、また「友達と一緒」というよりは、「友達の中で」という表現がよいのではないかなど、そのつながり方に着目し、ねらいや内容を設定しています。子ども同士の関係ができた四歳児でも、まだ友達とのやりとりを楽しんでいることが多いので、「友達と一緒」という表現は難しいと考えています。さらに五歳児になり、共通の目的を見いだしながら活動するようになって初めて、「友達と一緒」という表現を使っていました。

問題は、その次の段階、小学校でどんな友達とのかかわりを期待して、幼児期の「友達と一緒」を考えるかです。「友達と一緒」が幼児期の中だけで語られ閉じてしまっているのは残念ですから、その成果をどう小学校教育につなげていくかです。

人間としての成長という長い一生を見据えれば、幼児期は、ようやく友達と共有する世界をもち、さまざまなものや人とのかわりを楽しみながら、最終的に一人ひとりが自らの世界を広げていく時期です。まさにこの時期は、「友達と一緒」を通して新しい世界と出合い、学ぶことの楽しさを体験しています。

こうした学びの姿をとらえて、今回の幼稚園教育要領改訂では、子どもの発達や学び



の連続性を確保するための視点の一つとして、人とのかかわりを深める中で、協同する経験を重ねることを取り上げています。新幼稚園教育要領の領域「人間関係」の内容の取り扱いには、「③ 幼児が互いにかかわりを深め、協同して遊ぶようになるため、自ら行動する力を育てるようにするとともに、他の幼児と試行錯誤しながら活動を展開する楽しさや共通の目的が実現する喜びを味わうことができるようにすること。」と示し、**友達と共に新しい世界をつくりだす喜びの体験を大事にすることを述べています。**

友達と共に新しい世界をつくりだす体験

人間関係をテーマとした研修などで、筆者は、ビデオ教材「わすれてできる?—友達と先生の暮らしづくり—」(文部科学省特選・岩波映像制作)をよく使用します。友達と先生との日々の暮らしの中で、揺れ動きつつも友達と新しい世界を共有し、共に楽しむ五歳児の姿をよくとらえているからです。

たとえば、「お集まり」の場面です。戸外で使った大型積み木を保育室に運んできた二人は、それを片づけてから、みんなと一緒に活動に参加するつもりでした。ところが、椅子を取りに行く途中に、飼育箱の小さな虫に目が止まってしまったのです。それは、朝、園に送られてきた小包である「森の贈り物」の中で見つけた小さな虫です。もうすでに、みんなは先生の周りに集まって歌をうたい始めていますが、二人だけは、体はみんなの歌に合わせてリズムカルに動かしながらも、手には虫を持って二人で見合っ



ています。その生き生きとした表情からは、さっきの小包の「森の贈り物」のお話の余韻に浸っているかのようには思われませんでした。また二人は、虫がどうしているかを確認したい気持ちがいかに通じ合っていることを楽しんでいるかのようです。

二人が遅れてみんなの所に行くとき、椅子を置く場所がありません。二人のうちの一人が強引に入ろうとして、他の幼児を泣かせてしまいました。その様子を見ていた担任は、いつになく厳しい口調で、「どうしたらみんなで気持ちよく暮らせるか、少し考えながら暮らして……」と話しかけています。その子はもちろんですが、周りの子どもたちも神妙な顔つきで、担任の話聞き入っていました。それは、自分たちの暮らしにとって大事な問題として受け止めているからです。映像に映る子どもたちの表情からは、友達や先生の暮らしの中で起こる出来事の一つひとつに心が揺れ動き、友達とそれを共有しながら生き生きと活動する姿を読み取ることができます。ここには、確実に、友達と刺激し合い響き合う姿があり、共に学んでいこうとするクラスの雰囲気があります。

こうした関係は、たんに友達と一緒に活動すれば、また五歳児になればできるわけはありません。保育者が、子どもたちが行ったり来たりして「友達と一緒に」となっていく過程とじっくりとつき合い、互いに刺激し合い響き合う関係から協同的な学びが成立する過程をしっかりと支えることが必要なのです。